

バルトリハリによるPānini 3.2.123.の解釈

伊原, 照蓮

<https://doi.org/10.15017/2328673>

出版情報 : 哲學年報. 34, pp.358-344, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

バルトリハリによる Pāṇini

3.2.123. の 解 釈

伊 原 照 蓮

は じ め に

Pāṇini 3. 2. 123. は vartamāne laṭ/(動詞の現在形を示す語尾 laṭ は、それが現に行われつつある場合に用いられる) である¹⁾。この sūtra の vartamāne (それが現に行われつつある場合に) という規定に関連して Kātyāyana はこの sūtra に対して 5 個の vārtika を附して補正を行い、更に Patañjali はこれらの vārtika に説明を加えるとともにその末尾に特異な反対論を掲げそれへの論難をも示している²⁾。この箇所は既に学者によって注目せられ、或は興味ある所論として引用せられ、或は詳細な検討がなされている³⁾。従来はしかしながら、Kaiyaṣa の註 Pradīpa と Nāgeśa の復註 Uddyota がこの箇所を解明するための唯一の手がかりであったが、最近 Bhartṛhari にも当該箇所についての説明の存することを知ることができた。Bhartṛhari の説明は Vākyapadīya の第三篇第 9 章 Kālasamuddeśa 第 80 偈—第 90 偈に見出される⁴⁾。この説明は、従来の研究に若干の新しい知見を加えると思われるが、本稿ではその中 vārtika を説明した部分 (第 80 偈—第 84 偈) をとり上げ、その余は別の機会を俟つことにしたい。Helārāja の註と共に以下当該部分の和訳を示すことにする⁵⁾。

Kālasamuddeśa (第 80 偈—第 84 偈) 和訳

(第 80 偈に対する Helārāja 註)

今や時間 (kāla) の独自の性質が確定されたので、文典の中の、それ (=時間) に基づく言及が考察される。(即ち) vartamāne laṭ (Pāṇ. 3. 2. 123.) の箇所、(Kātyāyana はつぎのような補正の句を) 述べている。nityappravṛtte ca kāla-avibhāgāt/(vārtika. 2.) 「また (それが) 常住に存在する場合に (動詞の現在形を示す語尾 laṭ は用いられる)。(なぜかかる補正が必要であるのか、という)と常住に存在するものの場合には) 時間の区分が存しないから (Pāṇini の sūtra そのままでは、常住に存在するものの場合に適合しない故) である」と。もろもろの常住なものには時間の区分が存しないから、〈現に行われつつあるという状態 vartamānatva〉は (そこには) 妥当しない故に (常住に存在するものの場合にも) 現在 (bhavantī=laṭ) が (用いられるというが) 教えらるべきである⁶⁾。

(問) 現在時性 (sampratitanatva) が 〈現に行われつつある状態 vartamānatva〉であり、(それは)過去と未来の対立的相関者 (pratiyogin) である。而して常住なものは不断に存在するのであるから、(常住なものには) 過去と未来は存在しない。それ故 (常住なものの場合には) それ (=現在時称) がより一層適合するのである。

(答) その点については (次のように) 答えられる。ここで (挙げられている) これら時間に基づく、もろもろの呼称 (vyapadeśa) —— (それらは) 本性上相互に排除し合うものである —— は、時間による助力を受けている諸存在にのみ妥当する。而してそれら (諸存在) は、生起を有するもの (janmavant) (=常住ならざるもの) である。なぜならそこでは (=常住ならざるものにおいては)、一定の限界時点において生起することが承認されるが故に、それ (=時間に基づく呼称) が可能となるのである。即ち、未来のもの (bhāvin) は、手段 (sādhana) が現存して生起に向っているものであり、現在のもの (vartamāna) は、手段に基づいて生起したものがその状態を続ける限りにおいて (そう呼ばれるの) であ

り、過去のもの (bhūta) は、その体が失われたものである。それ故この「現在」という呼称は、過去と未来との (両) 極の中間に位置するものである。過去と未来の両者が存しないものについては (現在も) 決して存在しないのである。それ故 Mahābhāṣya において次のようにいわれているのである。即ち bhūtabhaviṣyatpratidvandvo vartamānaḥ⁷⁾ / 「現在は過去と未来に対して (併列的に) 一組を成すものである」と。実に過去と未来の両者が存する場合、その場合にそれ (=過去と未来) の対立的相関者 (pratiyogin) である現在が成り立つ、というのが (上掲の Mahābhāṣya の文章の) 意味である。而して常住なものにおいては、過去と未来との両者が存しないから、それ (=現在) も存しないのである。(上掲の vārtika 2 の文に対する) 文法上の構文 (prakrama) の必要から「現在が教えられるべきである。bhavantī śiṣyā」と (Mahābhāṣya で) いわれたのである⁸⁾。しかしながら (実をいうと、常住なものに言及する場合は) 時称 (tense) の接尾辞の全てが学ばなければならないのである。正しくその理由によって (vārtika 2 において) kālāvibhāgāt/ 「時間の区分が存しないから」といったのである。而して事情かくの如くであるから、そこにおいては (=常住なものの場合には) 時間の限定はないから、時間の制限を有する活動 (kriyā) は全く存しない。なぜなら、時間に制限されたそれ (=活動) は順序を有し (sakrama), 成就されつつある (sādhya māna) ということを本性とするからである。而もそこには (=常住なものの場合には) それ (=上記のような、時間に制限された活動) は存在しないのである。従って活動・格変化 (kāraṇa) の制限に関する確定 (vyavasthā) の全てが指示されるべきである。以上のことが (vārtika 2 において) 言われているのである⁹⁾。

その点 (=時間の区分が存しない、という点) に関して (Kātyāyana は次のような) 反論を述べる。即ち, santi ca kālāvibhāgāḥ/(vārtika 5) 「時間の区分は存在する」と。(その例として Patañjali は次のよう

な形を示している。即ち、「山々は聳えるであろう、聳えている、聳えていた (sthāsyanti parvatās-tiṣṭhanti asthuḥ)」¹¹⁰⁾と。更に (Patañjali によって次のような) 質問が示される。即ち「(上掲のような) これらの語が使用され得るが故に、時間の区分は存在する (といえる) のであるか (kim śakyanta ete śabdāḥ prayuktum-iti santi kālavibhāgā iti/)¹¹¹⁾」と。この質問の意図は次の如くである。即ち、(常住なものには) 時間の区分が存しないからこそ、(常住なものについて) これら (上掲のような) 語を使用することは成り立たない (のではないか) という工合に質問が提示されている場合に、これ (=常住なものについての上掲のような語の使用例) のみが決定因 (=常住なものにも時間の区分は存在することを決定する因) である、とどうして語られようかと。(このような質問に答えて) それ故に (Patañjali は次のように) いう。即ち、「必ずしも語の使用のみに基づくのではない (na-avaśyaṃ śabda-prayogād-eva-iti¹¹²⁾ /)」と。前後関係のあるもの (=活動) は動詞 (ākhyāta) から理解されるのであるから、語を証権とする (śabdapramāṇaka) 人々にとっては正しくそれ (=語の使用、具体的には動詞の使用例) からのみ意味が確定されるのである。それ故に語の使用 (例) が (常住なものにも) 時間の区分が存することに対する証権 (pramāṇa) となり得るのである。そうではあるが、しかしながら、仮令そのこと (=語の使用例が時間の区分が存することに対する証権となり得ること) を拒否したとしても、ここでは (=「山々は聳えるであろう、聳えている、聳えていた」というような語の使用例の場合には) 正しく意味の上において時間の区分が説明されるのである。以上が (上記の「必ずしも 語の使用のみに基づくのではない」という一文の) 意味である。それ故 (Patañjali は) いう。「過去と未来と現在の諸王の活動、それらが動詞の語根 √sthā の基盤である (bhūta-bhaviṣyad-vartamānānām rājñām yāḥ kriyās-tās-tiṣṭher-adhikaraṇam-iti/¹¹³⁾)」と

この Mahābhāṣya (の文) を (Bhartṛhari は) 説明して曰く。

(第 80 偈)

「全てのものは、他のものによって区別されるのである。しかし（そのもの）自体は変化することはない。それ故山等の存立は他のものの性質によって（そこに）区別が生ずるのである。」

parato bhidyate sarvam-ātmā tu na vikalpyate/
parvatādi-sthitis-tasmāt pararūpeṇa bhidyate // 80 // ¹⁴⁾

(Helārāja 註)

常住なる山等に対しても、他の、それ（＝山等）と共在する事物 (pa-dārtha) に所属する存在性 (sattā) に依存して（それら山等の）存在性に区別が生ずる故、時間の区別は妥当するのである。なぜなら存在物の集合の全ては制限 (upādhi) との結合によって区別されるのであって、それ自体として（区別されるの）ではないのである。「（それらが）区別される、というのは他の制限が（区別されるということ）である (bhinnā iti paropādhiḥ)」ということは既に (Vākyapadīya. III. 1. 第 20 偈において) 述べられているところである。王たちのもろもろの活動 (kriyāḥ) は、山等の存立に区別を生ぜしめるものであるから、基礎 (āśraya) として示されているのである。なぜなら、王たちのもろもろの活動には、（過去・現在・未来の）三時の性質、順序を有する性質、成就されつつあるという性質、が存在する。全くそれと同様にそれ（＝王たちの活動）と共在する山等に対しても、その存立にそれ（＝三時の性質等）が附託される (adhyāropa) のである。従ってこの場合（＝常住なものの場合）（過去・現在・未来の）三時に亘る（語の）使用は第二次的なもの (gauṇa) として妥当するのである。従って現在形（を山等の常住なものについて使用すること）は正しいのである。（第 80 偈の註終り）。

(第 81 偈に対する Helārāja 註)

或は（次のように考えるかも知れない。即ち）山等の現在時の存立は、王の活動と共在することによって各状態毎に基礎（＝王の活動）からの助

けを享受し、それ自体で区別を生ずる。しかしながら、共在する（王の）活動の区別による、その区別（＝山等の存立自体に生ずる区別）は、それ（＝存立という活動）が類似しているが故に、理解せられることがない。それ故（他によって）告知せられるのであると¹⁵⁾。（かくの如き考えに対して Bhartṛhari は）いう。

（第 81 偈）

「その構成部分をなす活動が（前後）異なっているような行動（vyāpāra）が（自らに）区別を生ずることは世間周知のことである。その構成部分をなす活動が（前後）類似しているような（行動は）（他との）共在によって区別を生ずるのである。」

prasiddhabhedā vyāpārā virūpāvayavakriyāḥ/
sāhacaryeṇa bhidyante sarūpāvayavakriyāḥ//81//

（Helārāja 註）

もろもろの行動（vyāpāra）の中には、その構成部分をなす活動（kriyā）が（前後）異なった性質を有することがある。このようなもろもろの行動——（例えば）「料理する√pac」「裂く√bhid」という活動形態をもったもの——が「（自らに）区別を生ずることは世間周知のことである prasiddhabhedā」,（換言すれば）時間を異にし正しく（前後）異なったものとして認められるのである。なぜなら「料理する」（という行動）の構成部分である「鍋を火にかける（adhiśrayaṇa）」等（の活動）は（前後）その特相を異にする（活動である）。「裂く」（という行動）の構成部分である「振り上げる（udyamāna）」等（の活動）も同様（に前後その特相を異にする活動）である。これに反して山等には「存立（sthiti）」——その特相は自体保持（ātmabharāṇa）である——という形態の行動（vyāpāra）があり、（その行動の）構成部分たる活動は（前後）類似している。このような（山等の）もろもろの行動は正しく（前後）類似しているが故に（前後の各活動間の）区別は確認し難い。（かかる山等の行動はそれと）共在するもろもろの王の活動——（それは前後）異なった（活動

の) 連続であり、(その前後の間の) 区分は確認される —— によって (それぞれ) 時間を異にしたものとして (=「山々は聳えるであろう、聳えている、聳えていた」という工合に) 示されるのである。またそれ故にかか
る王たちのもろもろの活動は、限定するものであるから (山等の存立に対
する) 土台 (ādhāra) となるのであり、(このような土台となっている王
たちのもろもろの活動が) 山等の存立に所属する時間 (=未来・現在・過
去) として表示されるのである。山等の存立はまた太陽等の特殊な運行に
よって、その (時間的) 区別が副次的に認識される。(Mahābhāṣya にお
いて王たちの活動が挙げられているのは) 王たちのもろもろの活動が (山
等の存立における時間的区別を) 副次的に認識させるものだからである。
なぜなら世間一般により一層知られている王たちのもろもろの活動が
Mahābhāṣya において述べられたのであるから。

(存立 sthiti と活動 kriyā との関係) 存立 (sthiti) は土台の支えによ
って瞬間毎に生れ変わるものであるから順序次第 (krama) に依存するも
のである。それ故 (存立 sthiti が) 活動 (kriyā) である、ということ
も矛盾ではない。即ち「類似性に依存した生起 (janma) こそは存立
(sthiti) に外ならない (janma-eva-āśrita-sārūpyaṃ sthitiḥ)」という
ことは先に (Vākyapadīya III. 8. 26. の箇所¹⁶⁾ で) 指摘した。而して
また常住なものについても、(それら常住なものが) 正しく疑いなき前後
関係において瞬間毎に確定されるのである。(その瞬間毎の確定が)「生起
(janma)」という呼称をうるのである。而して言語表現においては語の意
味が対象である。それ故動詞 (いまの例に即していえば ✓sthā) から理
解される意味 (いまの例では sthiti) が (上述のような理由に基づいて)
順序次第をもつ (sakrama)¹⁷⁾ のであるから、活動 (kriyā) の定義に正
しく合致するのである。(第 81 偈によって) 以上のことが理解される。
(第 81 偈の註終り)。

(第 82 偈, 第 83 偈に対する Helārāja 註)

次の語が (Kātyāyana によって) vārtika で述べられている。pravṛttasya-avirāme śiṣyā bhavanti-avartamānatvāt/(vārtika 1. ad Pāṇ. 3. 2. 123)「開始せられて未だ完了しない(行動の場合に(も)現在形(の使用されること)が、(Pāṇ. 3. 2. 123. の規定に対する補正として)教示せられるべきである。なぜなら(その場合にはその行動は)現に存在するわけではない(故 Pāṇini の規定のままでは、そのような場合に適合しない)からである」と。開始された(行動)がその主要な目的を達成しない故に完了しない時、 かもしれない他の活動を始めることによってその(開始された当初の)活動が過去のものとなった場合、 そういう時現在形の接尾辞(の用いられること)が指摘されるべきである。例えば iha vasāmaḥ/(ここにわれわれは住む), iha puṣyamitraṃ yājayāmaḥ/(ここにわれわれはプシュヤミトラのために供犠を行う), という工合である。供犠を行いつつあるにも拘らず他の活動を始めた人(=祭官)が、供犠の報酬(dakṣiṇā)等の主要目的を達成しない故に、供犠実行の意図を失わないで、このように(=「ここにわれわれはプシュヤミトラのために供犠を行う」というように)言うのである¹⁸⁾。(以上前主張 pūrvapakṣa)

その点に関して (Kātyāyana によって) 調停(の言)が次のように述べられる。nyāyā tvārambhānapavargāt/(vārtika 3.)「しかしながら(現在の接尾辞を具えた現在形をそのような場合に用いることは)正しい。なぜなら(その場合)企図は完了していないからである」と。主要な目的は現われていないが故に、またそれ(=主要目的の顕現)を限界とするものであるから一つの活動が他の活動によって妨げられても、その(当初の)活動は決して終了しているわけではない。それ故現在の接尾辞を具えた現在形(をそのような場合に用いること)は正しい。

もし、途中において他のもろもろの活動によって(当初の活動が)分断されているのであるから(当初の活動が)現に存在しないこと(avartamānatva)がそこでは明瞭に考えられる、と(敵者が)言うならば、その場合(Kātyāyana によって次のように)答えられる。asti ca muktasa-

ṁśaye virāmaḥ/(vārtika 4.)「また疑問の余地のない(現在時称にも)休止が存在する」¹⁹⁾と、なぜなら「彼は食事をする bhuñkte」等の、疑問の余地なき²⁰⁾ 現在形にも中間の活動の介在が正しく存在する。即ち Ma-hābhāṣyaにおいて次のようにいわれている, so 'py-avaśyaṁ bhuñjāno hasati jalpati pāṇīyaṁ vā pibati²¹⁾ / 「かれはたしかに食事をしながらも笑い噀り飲物を飲む」と。

以上のことを (Bhartṛhari は) 説明している。

(第 82 偈)²²⁾

「食事する、等の活動の集合 (kriyāsamūha) は中間のもろもろの行動によって恰も妨害された如くになり、中止した如くに認められることがある。」

(第 83 偈)²³⁾

「それ (= 食事する等の活動) は分断せられた形態をとるけれども、(そこで) 中止したわけではない。なぜなら (当初の活動の目的追求を) 止めたわけではないから。実に全ての活動は他 (の活動) と混合したもの如くに認識される。」

vyavadhānam-iva-upaiti nivṛtta iva dṛśyate/
kriyāsamūho bhuñjādir-antarālapravṛttibhiḥ//82//
na ca vicchinnarūpo 'pi so 'virāmān-nivartate/
sarvaiva hi kriyā-anyena saṅkīrṇā-iva-upalabhyate//83//

(Helārāja 註)

前後関係にある構成部分 (たるもろもろの活動) の総体より成る、〈食事する〉等の活動の集合は、中間に入った笑い、会話等のもろもろの活動によって、その過去及び未来のもろもろの瞬間が妨害された如くなる。而して〈食事する〉ことは、満足を果とするものであるから (そこには) 一つの相続 (santāna) が正しく確立されているのである。それ故 (偈の中で) 「如く iva」といったのである。なぜなら、(その場合、活動の) 集合が妨害されているのではなくして、(それを構成する若干の) 瞬間 (が

妨害されているの)であるから、而もそれだけの分量のもの(＝妨害されている若干の瞬間)は(当初の)活動の本質をなすものではない。未来の構成部分(たるもろもろの活動)の非存在を考え、過去の構成部分(たるもろもろの活動)を構想することによって、その〈活動の集合〉が中止した如くに認められることがあるのである。同様にまたこれ(＝食事する、等の活動)は中間のもろもろの活動によって部分的に分断せられた性質のものとはなるけれども、(満足という)目的を達成するまでは追求を止めないで、現在という性質をもったものとして正しく確定されるのである。単に〈食事する〉等(の活動)のみではない。笑い、会話等(の活動)に至るまでも、その他のもろもろの活動によって正しく妨害されるのである。眼を閉じる等(の活動)からの妨害があり、究極的には呼吸等(の活動)からも(妨害が)あるからである。休息し休息してから活動を開始するが故に混合したものの如くなるのである。しかしながら(一つの活動が他の活動と)全面的に混合することはない。なぜなら(その活動の)目的達成まで(追求を)休止することはないからである。必然的に生ずる中間のもろもろの活動が混合を生ぜしめるということは正しくない。予見(sandarśana)を始めとし結果(phala)を終りとする、瞬間の集合が活動(kriyā)である。而してそこでは中間に物的行動(bhautika-vyāpāra)が中止せられることはあっても、予見・追求(prārthana)等の心的行動(mānasa-vyāpāra)は、結果(phala)が獲得せられるまでは、決して休止することはないのである。同様に供儀の行為等についても(目的達成まで追求を)休止することがないのであるから、(そこには)現在という性質が成立するのである。(第82偈第83偈の註終り)。

(第84偈に対する Helārāja 註)

以上先ず、結果(phala)を終りとする集合(samūha)が活動(kriyā)であり、従って他の結果(phala)を因とする別の活動に妨げられても、(その当初の活動には)現在という性質のあることが根拠づけられた。そ

こで(別の観点から)中間に開始せられた別の活動が別個の種類のもでは決してない、とて (Bhartṛhari は次のように) いう。

(第 84 偈)

「或はそれ (=当初からの活動) の中間に認められる部分としての活動の全ては、仮令 (当初からの活動に属するものとして一般的に認められている部分的活動とは) 区別が存在しても、(一般的に認められている部分的活動との) 類似性の故に、それ (=当初からの活動) の支分 (aṅga) として承認せられるのである。」

tadantarāladr̥ṣṭā vā sarvaivāvayavakriyā/
sādr̥śyāt sati bhede tu tadaṅgatvena gṛhyate // 84 //

(Helārāja 註)

その〈食事する〉等の活動の中間に現われる、〈笑う〉等の種々なる活動は、〈食事する〉等 (の活動) の部分に外ならない。なぜなら、第二次的行動 (guṇavyāpāra) の形態をとっており、掌より水を吸う (ācamana) (活動) 等と同じく、(〈食事する〉等の活動を) 助けるからである。それ故、掌より水を吸う、等 (の活動) との類似性の故に、笑い等は〈食事する〉ことの支分として承認せられるのである。笑い等は或る場合には存在しなくとも、〈食事する〉行為は終了するのであるから、〈凝乳 dadhi を (ご飯に) かける行為〉等——(これは、食事という行動の) 支分 (aṅga)²⁴⁾として (笑い等よりは) より一層広く認められている (行為である)——と、(笑い等との間には) 区別は存するのであるけれども、恰も荷物が二人によって運ばれている時 (そこに) 加わった第三番目の人 (が以前の二人と同じく荷物の運び手の一人として数えられるの) と同様である。(偈の中の) tu という語は api の意味である。実に友人たちは幸福な気持で相互に笑い・会話等をまじえながら食事をするのである。

(前主張 pūrvapakṣa と定説 siddhānta との観点の相異) 以上述べた如くここでは、部分毎に活動 (kriyā) は完結するものである、と考えて前主張 (pūrvapakṣa) が立てられたのである。(どのような道理によって

かかる前主張が立てられたのか、というならば）「（過去の意味を表はす）*niṣṭhā*（＝接尾辞 *ta* 及び *tavant*）は行動の始めを表わすことがある。（そしてこの行動の始めを表わす *niṣṭhā* が過去時称のものであることは）正しい。なぜなら（そこでは）始め（るという行動）は完了しているのであるから、（*ādikarmaṇi nyāyyā tvādyapavargāt*）²⁵⁾ という（*vārtika* によって示されている）能力を *niṣṭhā* が有する、という道理によってである。これに反して結果（*phala*）に至るまでの活動の集合（*kriyāsamūha*）（を考えること）によって定説（*siddhānta*）が述べられたのである²⁶⁾ 以上のように確定した。（第84偈の註終り）。

註

- 1) L. Renou, *La Grammaire de Pāṇini*, Fascicule I. p. 132. なお Vasu, *The Siddhānta Kaumudī*, vol. II. p. 2. 参照。
- 2) F. Kielhorn, *The Vyākaraṇa-mahāśhya*, vol. II. pp. 123-4. reprint edition, 1970.
Patañjali's *Vyākaraṇa Mahābhāṣya* with Kaiyaṭa's *Pradīpa* and Nāgeśa's *Uddyota*, vol. III. pp. 195 ff. Nirṇaya-sāgar press. 1937.
- 3) V. G. Paranjpe, *Le Vārttika de Kātyāyana*, pp. 74 ff. Heidelberg. 1922.

H. Scharfe, *Die Logik im Mahābhāṣya*, pp. 148-9. Berlin. 1961.

金倉円照博士「時間論の一資料—特に『マハーバーシュヤ』の一節について—」雑誌『宗教研究』第4年第2・3輯，昭和17年7月，（金倉博士『インド哲学仏教学研究』〔1〕仏教学篇に再録，春秋社，昭和48年6月，225頁以下）

この問題の箇所について最も詳細な検討を加えたのは管見では、この金倉博士の論文である。

- 4) P. S. Sharma, *The Kālasamuddeśa of Bhartṛhari's Vākyapadīya*, Motilal Banarsidass. 1972. pp. 103 ff.
- 5) K. S. Sāstri (ed.), *The Vākyapadīya (3rd Kāṇḍa) with the commentary Prakīrṇakaprakāśa of Helārāja*, part I.

(Trivandrum Skt. Ser. No. CXVI) pp. 80 ff.

Text としては上記 Trivandrum 本を使用したが、Benares 本をも手許において参照した。但し Benares 本と Trivandrum 本との間には句読その他のかなりの相違が見出されるが、Trivandrum 本の方が善本と思われるので、

その一一は註記しない。

- 6) 常住に存在するものの場合に *laṭ* が用いられる例として *Patañjali* は *tiṣṭhanti parvatāḥ*/(山々が聳える); *sravanti nadyaḥ*/(川が流れる) を挙げる。
- 7) *ad vārtika 2*, Kielhorn, op. cit. p. 123. I. 7.
- 8) cf. *nityavṛtte ca śāsitavyā bhavanti*/(Mahābhāṣya ad vārtika 2, Kielhorn, op. cit. p. 123. I. 6.)
- 9) 以上が *vārtika 2* に対する *Helārāja* の説明である。 *Helārāja* はこの後引き続いて、*vārtika 2* に対する反論として *vārtika 5* を挙げ、これに註釈を加えている。別言すれば *Helārāja* においても *vārtika 5* は *vārtika 2* への答として理解されているわけである。金倉博士、上掲論文(春秋社版 228 頁)参看。
- 10) cf. *tiṣṭhanti parvatāḥ/sthāsyanti parvatāḥ/tasthuḥ parvatā iti*/(Kielhorn, op. cit. p. 123. II. 17-8.)
- 11) P. S. Sharma の指摘する如く (op. cit. p. 105. footnote 2.) *Trivandrum* 本のこの箇所句読は不適当である。Benares 本の句読 (p. 374. II. 3-4.) の方が適当である。Kielhorn 本 (p. 128. I. 18.) では *prayoktum-iti* の次に *ataḥ* が加えられている。
- 12) Kielhorn 本 (p. 123. I. 19.) では、この一文の中 *śabda* の字を欠く。なお Benares 本 (p. 374. I. 6.) は Kielhorn 本と同じである。cf. P. S. Sharma, op. cit. p. 105. footnote. 3.
- 13) Kielhorn, op. cit. p. 123. II. 19-20.
- 14) *Kaiyaṭa* は *Pradīpa* の中でこの第 80 偈を、次の第 81 偈と共に引用。
Nirṇaya-sāgar press 本, vol. III. op. cit. p. 196. また *Kauṇḍabhaṭṭa* の *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* (*Kāshī Skt. Ser. No. 133. p. 121*) にも第 80 偈は引用されている。(但し引用文は両者ともに、第 80 偈前半の *vikalpyate* を *vikalpate* とする。) また第 80 偈は *Kauṇḍabhaṭṭa* の *Vaiyākaraṇabhūṣaṇa* (*Bombay Skt. & Prakrit Ser. 本, p. 74*) にも引用されているという (K. V. Abhyankar & V. P. Limaye; *Vākyaapadīya of Bhartṛhari. University of Poona Skt. and Prakrit Ser. vol. II. Appendix III. p. 179.* による。)
- 15) この一文の末尾の部分は筆者の有する Text (写真版) が明瞭でないこともあって、はっきりしない。またこの一文は Benares 本では若干の辞句を異にする。しかし乍らこの箇所で *pūrvapakṣa* の論旨はいずれにしても動かない。
- 16) *Vākyaapadīya* III. 8. *Kriyāsamuddeśa* の第 26 偈後半は次の如くである。

janma-eva-āśritasārūpyaṃ sthitir-ity-abhidhīyate //

(Trivandrum 本. p. 32. l. 11.)

この偈に対して Helārāja は「類似したものの流れの形態をとるが故に、区分の確定せられない生起 (janma) がこのように <sthitī> とよばれるのである (sadṛṣaprayāharūpatayā anirdhāryamānavibhāgaṃ janma-evamabhidhīyate sthitir-iti/)」(op. cit. p. 33. l. 10.) と註している。

17) Benares 本 (p. 375. l. 8.) に従う。

18) Patañjali は、iha vasāmaḥ/iha puṣyamitraṃ yājayāmaḥ/の外に iha-adhīmahe/(ここにわれわれは学ぶ) の例を挙げている。そして、既に指摘されている如く(金倉博士, 上掲論文, 227 頁) Kaiyaṭa は iha-adhīmahe/について、勉強の途中、一時食事をなして勉強していない時には、Pāṇini の規定では iha-adhīmahe/という現在形は不適合となる、という。

19) Benares 本 (p. 375. l. 18.) には asti ca muktasamśayo virāmaḥ/とある。またこの vārtika に対する説明の箇所では Patañjali は次のようにいう。即ち, yaṃ khalvapi bhavānmuktasamśayaṃ vartamānaṃ kālaṃ nyāyāṃ manyate bhuñkte devadatta iti tenaitattulyam/(Kielhorn 本. p. 123. ll. 13-4).

(「デヴダッタは食事をする」という、正しい現在を疑問の余地のないものと汝は考える。それ(=汝が疑問の余地のないものとする現在)とこれ(=休止virāma)は等しいのである。)この説明からすると muktasamśayo の方がよさそうにも思われる。しかし Kielhorn 本, NSP. 本共に muktasamśaye とあるので、いまはそれに従う。

20) nissamśayo を nissamśaye とよむ。

21) Kielhorn 本. p. 123. l. 14.

22) 第82偈, 第83偈は次の第84偈と共に Kaiyaṭa によって引用されている。NSP. 本. op. cit. p. 195.

23) 第83偈は Benares 本では脱落している。

24) Benares 本 (p. 376. l. 19.) に従う。

25) いまここに示した文は Trivandrum 本に掲げられているものである。これはその箇所註に記されている如く, Pāṇ. 3. 2. 102. に対する vārtika よりとったものと思われるが, vārtika の文そのままではない。当該 vārtika 及び bhāṣya をこの箇所の理解に必要な限りにおいて示しておく。

(vārtika. 3.) ādikarmaṇi niṣṭhā// 「niṣṭhā (分詞語尾 ta 及び tavant) は行動の始めを意味する。」

(Mahābhāṣya) ādikarmaṇi niṣṭhā vaktavyā/prakṛtaḥ kaṭaṃ devadatta iti/「niṣṭhā が行動の始めを意味することがある、ということが指摘さ

るべきである。例えば、〈デーヴダッタは蓮を作り始めた〉という如くである。」

(vārtika, 5.) nyāyā tvādyapavargāt/「(行動の始めを意味する niṣṭhā が過去時称であることは) 正しい。なぜなら、(そこでは) 始め(るという行動) は完了しているのであるから。」

(Mahābhāṣya) nyāyā tveṣā bhūtakālātā/kutaḥ/ādyapavargāt/ādirātrāpavṛktaḥ/eṣa ca nāma nyāyā bhūtakālo yatra kiṃcidapavṛktaṃ drśyate//「しかしこれ(=行動の始めを意味する niṣṭhā が過去時称のものであること) は正しい。なぜか。始めが完了しているから。(即ち) そこでは始め(るという行動) は完了しているのである。そして或ものが完了していることが認められる場合、それはまさしく過去である、ということは正しいのである。」

ここで Patañjali の掲げる例文 prakṛtaḥ kaṭam devadattaḥ/に即していえば prakṛtaḥ の末尾の分詞語尾 ta は、蓮を作るという行動の始めを意味するのであるが、その tense という点からいえばあくまでも過去である、というのである。換言すれば、そこでは〈作り始める〉という行動が完了している、というのである。なお過去分詞が「〜し始めた」の意味に用いられることについては辻直四郎博士『サンスクリット文法』(岩波全書) 301 頁をみよ。また L. Renou, La Grammaire de Pāṇini, の当該 sūtra (3. 2. 102.) の項参照。

niṣṭhā に上述のような能力があるという考え方からすれば、行動は各部分毎に、極端にいうならば各瞬間毎に、完結していることになる。前主張はこのような考え方によっている、というのが Helārāja の説明である、と解される。

なお Benares 本 (p. 376. II. 22-3) では ācamanādikarmaṇi nyāyā tvārambhānapavargāditi niṣṭhāsamathanena nyāyetyabhipretya pūrvapakṣaḥ pravṛttaḥ/とある。ここには若干の辞句の相異 (ācamana の附加, °samathanena nyāyā の部分の相異), 或は誤りと思われるもの (ārambhāna の na は不要) が存するが、論旨においては Trivandrum 本のそれと異なるところはない。

- 26) 前主張と定説との間の観点の相異は次のようにいうことができよう。即ち、活動 (kriyā) は各部分毎に完結する、という考え方をとるのが前主張である。これに対して、活動 (kriyā) は、各部分毎に完結するのではなくして、結果 (phala) 実現に至るまでの活動の集合 (kriyāsamūha), 別言すれば結果実現に至るまでの活動の過程の全て、としてとらえられなければならない、というのが定説の考え方である。

(本稿は昭和48年度文部省科学研究費による研究成果の一部)